さぁ、お前たちの幸福を数えろ

キシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さぁ、お前たちの幸福を数えろ

【Ｎコード】
Ｎ２６４５Ｎ

【作者名】
キシ

【あらすじ】
貴方は友情を選びますか？それとも愛情を取りますか？嫌いになった訳でもないのに、彼女を振るのは並大抵の勇気じゃ足りません。女性の立場から見れば、最低かもしれませんが、俺は彼女とアイツの幸せを第一に考えています。

（注意）
特に何が言いたいわけではありません。キシの体験談を小説風に書いてみただけです。それを踏まえたうえでお読みください。

「あ、そうそう。俺今度結婚するんだ。」

そう言い、俺の友達は口に珈琲を運ぶ。

「「「「は？」」」」

喫茶店に集まった俺とその他の友人3人の声が重なり、疑問を投げかける声を上げる。

「いや、だから今度の連休に結婚式を挙げるの。分かった？」

「いやいや。そう言う事を言っているのではなくてだね。」

友人の一人が、手を出し首を左右に振りながら言い放つ。

しかし、そんな光景を見ても俺は大して驚いていなかったのが、実情だった。

なぜなら、この友人の結婚相手は

俺の元彼女だからだ。

友人たちが、新郎候補の友人と笑いながら話す中。俺は口にクリームソーダを入れる。
あいつの指にはめられた、婚約指輪を見ながら・・・・・・・・・。

友達と別れ、あいつと二人。
俺達は歩いていた。

「これ受け取ってくれないか？」

「ん？」

そう言い、渡された手紙。
その手紙がなんなのかはすぐに分かった。

結婚式の招待状だ。

「来て、くれるよな？」

「・・・・・・へ。当たり前だろ？親友の結婚式だぞ？行くのが親友の務めだろ？」

そう言い、俺は手紙を奪い取るように受け取る。

その言葉を聞いて、あいつは笑った。
嬉しそうに。そして、無邪気に。

そんな、あいつの顔を見て。一瞬俺は思った。

『殺してやりたい』

（！！！なに考えてんだ俺！冗談じゃない！！）

急に過る、変な考えを振り払おうと、軽く首を左右に振る。

「どうした？急に首振って？」

「急に、フラッとしてな。今日は帰るわ。」

「おう。またな。」

そう言い、俺達は別れて、自分の家へ向けて足向ける。

家の鍵を開けて、寝室へ直行する。

特に腹は減ってない。何より食いたくない。胃が食事を受け付けない。

そんな、感じと言えば分かると思う。

上着を着たまま、ベットに倒れるように横になる俺。

ベットの上には、ピンクの長い猫のぬいぐるみ。

脱力系な顔が、なんとも言えない愛くるしさを醸している。

しかし、今はそんな猫の顔が勘に触る。猫の顔を見ないように顔を背ける。

こいつの顔を見ていると、あいつの顔を思い出す。

上着のポケットに入っている招待状を取り出し、見てみる。
ポケットに入れたままのため、多少歪んでしまった招待状。

「チッ・・・・」

思わず、舌打ちをして、招待状をパソコンのキーボードに向けて投げる。
上手く上に乗らなく、招待状は小さな音を立てて、床に落ちる。

「あぁ～ぁ・・・・・。世の中上手くいなねぇ～のな・・・・・・。」

独り言をつぶやき、メガネをはずし、枕に顔を埋める。

何時からだろ？
俺が、アイツと一緒に遊ぶようになったの？
あぁ～・・・・確か。小６くらいか？
きっかけは・・・・・。確か、ガンプラの話題で、意気投合して・・・・当時流行ってた、ギャザリングを一緒に初めて・・・から、今までの付き合いか。

なんでも、競って、喧嘩して。食べて笑って。
で、高校、専門も同じ所行って。挙句、同じ奴好きになって。

「アイツ、お前の彼女の事、好きだったみたいだぞ？」

専門の時、友達経由で聞いた、あいつの本音。
この時まで、知らなかった・・・。
あぁ～・・・。そう言えば、彼女。結構あいつの事気にしてたっけなぁ・・・。

「なんか、結構落ち込んでる見たいだぞ？」

「・・・・ふ～ん。」

気にしなさそうな、返事をして飯を頬張る俺。

さて、どうすっかなぁ・・・。

自問自答するが、結局答えは出てるんだが・・・・。
晩飯・・・・何食うかな？

この後、俺は彼女をフッた。
これを『最低』『女の敵』と呼ばれるのであれば、俺は喜んで受け入れよう。

その後、彼女はあいつとくっつくまでにさほどの時間はかからなかった、と言えば嘘になる。
結構なお膳立てとフラグを設置して、ようやくといったところだった。

それから、女友達からいろいろ聞いた。
彼女は、俺とあいつ。どっちが好きなのか分からなくて、結構悩んでたみたいだった。

でも、俺はあいつが、落ち込んでる姿を見たく無かった。

あいつは、俺より気が利いて、イケメンで、金銭感覚もしっかりしてる。だから、俺より、あいつといる方が、彼女も幸せだと・・・
俺は勝手に思い込んでた。

でも、もう遅かった。
後の祭りって奴だった。

目を、開けると外は暗かった。
どうやら、眠ってた見たいだった。
起き上がると、俺から毛布が落ちる。
毛布？おれ、被って寝てたっけ？

とりあえず考えるのを止めて、カーテンを閉めて、パソコンを起動させる。
小説は打つ気になれらなった。コラボ中なのに、迷惑な作者だなぁ、俺。
最近はいろいろありすぎた。頭の中には、小説のネタは湧いてくるのに気分が乗らない。
こうして、パソコンの前に座るのって、何時ぶりだろう。すげー久々な気がしてきた。

そこで、俺は、パソコンのキーボードにおかれた招待状と鍵がおかれているのに気づく。
鍵の正体がなんなのかはすぐに分かった。

この、部屋の合いカギ。
持っていたのは、元彼女。

「・・・つーことは、ここの鍵は開きっぱなして訳か。」

自分でもなんとも素っ頓狂な事を言ったなと思うが、まず第一に思いつく事がこれだ。
鍵と招待状を端に寄せて、パソコンで二コ動を見始める俺。

面白くない。表面上の表情は笑っていても、心が笑ってない。
動画を見ていても、視界には入ってくる招待状。
「・・・・・・はいはい。見れば良いんだろう。」
また、独り言を言う俺。一人暮らしなんて、こんなもんだ。
招待状の中身を見る。
一枚は何の変哲の無い招待状。
もう一枚は、市販された便箋だった。

便箋には、いろいろ書かれていた。
あいつと彼女の事を思って、フッた俺に対しての感謝の言葉。
その他もろもろｅｔｃ.
なんか、泣けていた。
こんな、俺でも感謝してくれるのか、て思うと感動してきた。
「・・・・・・こんな事書かれちゃ、全力で祝福せにゃいかんな。」
なんか、ふっきれた。すごく気分が楽になった。
祝福すんなら、何かインパクトのあるやり方が良いだろう。そう考える俺。
そこで、一つの動画を見て、ひらめく。

まさに、これだ！と、思うネタだった。

様々な下準備を経て、結婚式を迎えた。

新郎と新婦の挨拶。祝福の言葉、堅苦しい職場の上司の言葉。
一通り終えて、俺の横に居る友達が、耳打ちする。

「おい、そろそろ良いんじゃね？」

「はいよ。んじゃ、行ってくるわ。」

「おう。一発かましてこい。」

そう言い、俺は席を離れ、トイレを行くふりをして、用意された別室でスーツから、自作した別のスーツに着替える。
腰にベルト巻き、２本のメモリーを指す。
メモリーを指した事で、メモリーから音が鳴り、近くの職員が笑いをこらえる。

会場の外の扉の前で待っている友人に合流して、俺は出番を待った。

「・・・・・さて、そろそろか。・・・・すいませーん。お願いします。」

友達が式場の職員に話し、職員が俺たちのサプライズイベントの準備はじめてくれた。

「・・・行って来い！」

「まかせな！！」

拳と拳を合わせ、気合いを入れる俺。

ドア越しに、聞こえてくる音楽と職員のアナウンス。

『では、ここで新郎と新婦の祝福を祝いに特別なお方がいらしています。』

アナウンスの後に続く、俺の兄貴につくってもらった、ＢＧＭ。

『来い！ファング！！』

『ギャァァァァァァ（恐竜的鳴き声的な物）』

『変身！！』

『ファング！！ジョーカー！！』

ドライアイスの霧が床一面に広がり、部屋の中は真っ暗だった。
ゆっくり中に入って行き、会場の真ん中で立ち止まる。
そこで、さらにアナウンスが入る。
俺は、それに合わせてポーズをとる

『さぁ、お前たちの幸福を数えろ！！』

無論、この声は兄貴に作らせた合成音なのは言うまでも無い。

『新郎と新婦の幸福を祝して、仮面ライダーWがいらしてくれました。』

おい、アナウンス！ただのWじゃないぞ！ファングジョーカーだ！
忘れるな！

待機していた友人が花束を渡して、それを持って新郎達に近づき、
それを渡す。

二人とも笑っているが、目に涙だ滲んでいた。

涙が出るほど面白い事したか？

そして、ここで俺の書いたメッセージが読み上げられる。
これは、ごくごく普通のメッセージだ。

しかし、新郎新婦の家族の顔は・・・・・・察してくれ。
連れて来られた子供達は大興奮だったが。

こうして、結婚式は事なきを得た。

帰り道、キャリーケースを引っ張りながら歩く俺。
突然携帯が鳴り始める。
メールの着信音だ。相手は・・・あいつからだった。

『かなり面白かったぜ。ほんとありがとうな

お前が友達で良かったよ。』

「ったく。文字の無い部分が多すぎるんだよバカが。・・・・・・・・
・俺もお前のダチで良かったよ。」

そう言い。俺は携帯を閉じ、車に向けてキャリーケースを運ぶ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2645n/

さぁ、お前たちの幸福を数えろ

2010年10月14日12時54分発行